

「先生は希望の党についてどう思われますか？」

平成 29 年 10 月 3 日

●国を想う大学生さんからの質問

端的にお尋ねしますが、西田先生は希望の党をどうお考えですか？僕は、個々に見ると中山恭子先生のような素晴らしい先生も加わるようですが、全体としては反安倍の風潮の中でまとめ、国民を守るためなどではなくそれ自体で目的化した中身なき憲法改正、大衆受けする脱原発などを掲げる薄っぺらい政党にしか思えません。そういう政党が、安倍政権は国民を無視していると言っても自分達も・・・としか思えません。自民党には、北朝鮮の危機に直面した中でこういった政局中心ではなく国民本意の政党として頑張ってもらいたいです。あまりに（野党側の）政治の現状が酷いあまり、こういう話を聞いてくれるであろう西田先生に質問いたしました。長文ですみません。西田先生の考えをお聞かせください。

●コロンさんからの質問

希望の党についてどう思いますか。私は、民進党がごっそりそのまま合流するなら支持できませんが、もし、憲法観や安保法制などで合致できる候補者をしっかり選別出来れば支持しても良いかなと考えます。選別から漏れた立候補者は共産が支持するようなことも言っているのです、この機会は、真に国益をそれぞれの立場から追求し合える二大政党制になり得る最大のチャンスではと考えますがどうでしょうか。

●西田昌司の答え

希望の党が結党されると（自民党との）保守二大政党制となって、民進党の左寄りの議員を排除できるのでは、という希望的観測を持つ人がいます

が、そのようなことにはならないと思います。

希望の党の代表の小池百合子東京都知事は、リベラル派は排除すると宣言して、安全保障政策や憲法観といった根幹部分で一致することが政党構成員としての必要条件だと言っていました。しかし本日（10月3日）、希望の党の第一次公認候補となった顔ぶれを見ると、安保法制に猛反対していた民進党の議員が名前を連ねています。この時点で、レッドパーズなどは全くの幻想であることがはっきりしました。希望の党の構成員は、かつては民主党議員だった現浪人や、細野さんのように民進党から離党した人、さらに今回「名を捨てて実を取る」という前原さんの掛け声とともに合流してきた大量の民進党議員です。結局、希望の党は第二民進党と言って差し支えないのです。

小池さんや前原さんらは、細川さん率いる日本新党に参加して初当選された方々です。小池さんのように自民党に入ったり出たり、前原さんのように野党を渡り歩いたりと様々ですが、小池さんや前原さんがこれまでに何をしてきたのかと考えると、とても希望を持てるような党ではないと思えてしまいます。東京都知事である小池さんが、豊洲やオリンピックといった問題を中途半端なままにして国政にまで関わろうとするのは悪乗りやし過ぎでしょう。また前原さんにしても、民主党政権時の政治の混乱によって国民生活は大きなダメージを受けましたが、そういったことの総括を前原さんらがしているとはとても思えません。元民進党の議員が希望の党に入った今となっては安全保障の確立や憲法改正のポーズを示したとしても、ちょっと前までは安保法制に猛反対していて国会の憲法審査会でまともな議論もできていなかったとなると、政治家としての信念など全く感じられませんし、人としても信用できないわけです。

民進党は共産党とも連携して安保法制に猛反対していましたが、それも結局は反安倍の政局を作って自分たちの存在価値を見いだそうとするかっこつけだったのです。そんな彼らが希望の党になだれ込むのも、このまま民進党にいても自分の身が危ういからという保身に他なりません。前原さんは「名

を捨てて実を取る」といみじくも言ったものですが、そんな醜態を国民に晒す自らの不名誉な姿に彼らは思い至らないのでしょうか。希望の党は、その成り立ちからして全く信頼できません。

アベノミクスによって民主党政権時よりも経済が良くはなりましたが、まだ十分でないのも事実です。今度の衆議院選挙によって安倍政権は国民にこの5年間の審判を受けることとなりますが、小池さんは今度の選挙で政権交代するとまで言い切っています。言うのは勝手ですが、であれば誰が総理大臣になるのかが問題です。

首班指名は国会議員でなければ受けられませんし、小池さんは東京都知事である限りその資格はありません。小池さんが衆議院選挙に出馬して当選すれば首班の問題がなくなるとしても、その場合はどうやって東京都民に説明するのでしょうか。本日（10月3日）の時点で、小池さんは絶対に出ないと明言されていますが、そうすると小池さんは首班指名を受けることができません。では、他の誰が首班指名を受けるのでしょうか。前原さんや細野さんや若狭さんが首班指名を受けることなど想像もできませんし、国民に受けはしません。仮にそのようなことをすれば小池さんの顔で売っている希望の党は急速に支持を失うはずですよ。ですから、詳細には触れずにただ政権交代のフレーズのみを繰り返すというお粗末な格好となっているのです。

小池さんは、総理の座につけるような見込みがあれば都知事の椅子を放り投げてでも衆議院選挙に打って出たかもしれません。しかし、そうもいかないとなると都知事を放り投げて国会議員に返り咲いたという批判をされるような道を簡単に選ぶことはないでしょう。今度の選挙で、希望の党はある程度の議席を得ることになるとは思いますが、政権交代するほどの勢いはありません。しかし、憲法改正をネタとして自民党と連立を組むといったことはあるかもしれません。その場合はいくつかの閣僚のポストが希望の党に転がり込んでくることだってあるでしょう。そんなタイミングで、小池さんは都知事を辞めて副大臣のポストを得ることだって考えられます。そうすることで小池さんは政権に一步二歩と近づくことができますが、これこそが小池さ

んの狙っていることではないでしょうか。

結局、希望の党に参集する人達を見ていると、権力に近づくにはどうしたらよいかというハウツーをやっている人の集まりなのだなという感じがします。彼らにとって大義は二の次であって、まずは自分がどうやって生き残るかという自分ファーストな人達なのです。よく、ニュービジネスの世界で「どうやれば儲かるか」といったことが語られますが、それと同じ感覚で「どうやれば議席にありつけるか」に必死なのが希望の党の本質なのでしょう。しかし、政治とビジネスが全くの別物であるのは言うまでもないことで、そんなビジネス感覚で政治をやってもらっては困るのです。

政治は結果責任だということがよく言われます。政治家が結果に責任を負わなければならないのはもちろんですが、それと同時に過程においても責任を問われるのが政治です。なんでも出鱈目をやって選挙に勝てさえすればよいという姿勢では国民の信頼を得ることはできません。政治家は過程においても矜持を示さなければならないのです。

前原さんは民進党の代表とはなったものの、民進党の支持率は非常に低く、言わば倒産しかけの会社の社長のようなものでした。先行きが全く見えずに困っていたところに、ニュービジネスの新興会社である希望の党に合併を持ち掛けられたので、会社の存続のために主義主張の相違には目をつむって合併したといったところでしょう。しかし、政策の議論もなしに何の合意もないままの合併とあれば、早晩また分裂騒ぎとなるのは目に見えています。

希望の党に入れなかった民進党議員は枝野さんの立ち上げた立憲民主党に参集しましたが、前原さんも枝野さんも、何故このような事態になってしまったのかについて深く反省すべきです。かつては国民から絶大な支持を受けて政権交代を果たした彼らがなぜここまで国民の信頼を失ってしまったのか、彼らは政権を奪還されてからも根本的な議論をしないままに今日まで来てしまったがための今回の分裂騒ぎなのです。

人間にとって大切なのは自反・自省の精神であり、政党もそういった精神を大切にしなければなりません。そういった精神が希望の党からは一切見えてこないというのが率直な感想です。一方、自民党は下野した際に徹底的に総括を行いましたし、それが政権復帰の原動力となったのです。有権者におかれましては、熱に浮かされることなく冷静な判断をされることを切に願います。

反訳：ウッキーさん

Copyright：週刊西田 <http://www.shukannishida.jp>